

稲山会 通信

第20号

2010年1月7日発行

発行人：斉藤雄二 発行所：稲門山の会事務局 TEL03-3367-3723 FAX03-3367-8150 ©稲門山の会1998

平成22年を迎えるにあたり

昨秋の会のキャンプでのこと……。

早稲田大学山の会、稲門山の会、会員の登山での安全を祈願すべく、山の神に祝詞を捧げていた時、突然、山奥の雲間から神様が降臨して、私に向かいて曰く。「われは、丹沢山に住みおる八百万神の中にて、山の神と申すものなり。して汝ら何処より来たりしか」。

神様ならば何でも知っているのではなかろうかと思いつつも、余り逆らってもそれこそ触らぬ神に祟りなしと云うではないかという気もし、「われらは、都の西北に学府ありて、そこに学びし者の集いにて候」。どうも神とのやりとりで、言葉までおかしくなってきたようだ。

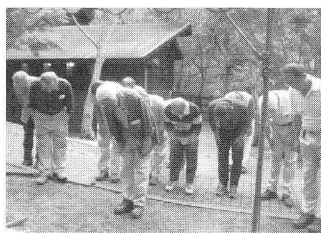
神曰く「汝らの50数年の山の登り方、考え方をみるに、山での安らけしの願いを安堵せしめるに価するものと定めよう。さて汝ら、神頼みのみにて願い通ずると思うなかれ、我も忙しき身なれば、すべての願いに加護を授けるわけにはゆかぬ。されど若き者は身の丈を考え、老いたる者は昔にのみ重きを置かず、今をよく弁えて登る様心がけるなら、その身は安らかならざらん」。

まあ、もっともなお言葉で、神様の云うことだから間違いはなかろうと思いつつ、面を上げると、祭壇に奉納した御神酒のほとんどが無くなっていた。

その後満月でのキャンプファイア、宿舎での集い、でも神様はちらり、ちらりと現れて、手酌で飲んでおられました。よほどお酒が好きなんだ。



▲上田代表の祝詞



▲二礼二拍一礼

今年は御神酒をもっと増やして祈願することにしよう。

夜が白々と明けるころ、神様は丹沢山の雲に乗りて霞と共に失せにけり。面白くて変わった山の神であった。

平成22年1月

稲門山の会代表 上田訓央

新年会のご案内

日時：2010年2月6日（土）15：00～18：00

場所：大隈会館2階

会費：6000円 尚、当日4000円の年会費を徴収させていただきます。

☆ 昨年から土曜日に新年会を開催するようになり、地方からの出席者も増えました。更なる地方在住者の皆様の出席を期待しております。

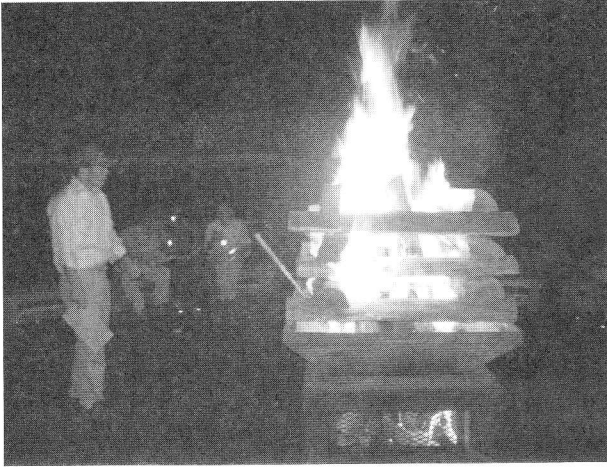
☆ OGの皆様も是非ご参加いただき、旧交を温めて下さい。

☆ 若いOB・OGの皆様には、横の連絡を取っていただき、多数参加されることを希望しています。

『秋のキャンプ』 報告

齊藤延雄 (S.45年卒)

恒例になりました秋のキャンプを、昨年10月3日(土)～4日(日)に東丹沢清川村の<清川自然の村>で行いました。当施設は市民が自然に親しみ、自然を学ぶ野外活動の拠点として、座間市(神奈川県)が設置した宿泊施設です。部屋は隅々まで掃除が行き届き、トイレ・シャワーも完備された素晴らしい施設でした。



▲キャンプファイヤー

参加者 上田(34卒)、市村(35卒)、西山(36卒)、松村(38卒)
井村・笠原・長谷川(40卒)、宮尾・金子・齊藤雄(41卒)、太郎良(43卒)、
青山・齊藤延(45卒)、新井(46卒)、豊田(47卒)

※迫田OB: キャンプ場の申し込み、お手数掛けました。

OB諸兄: ワイン・ビール等の差し入れ、有難うございました。

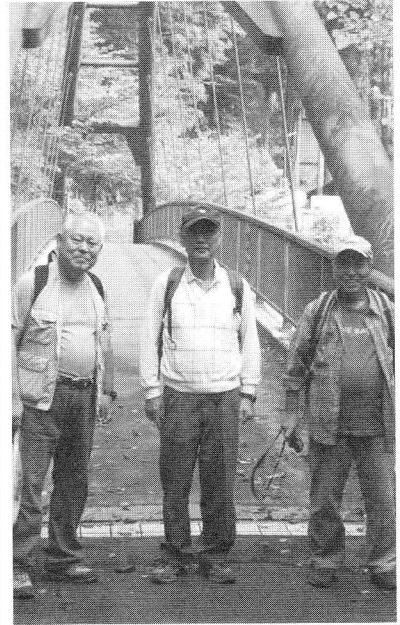
当日は天候にも恵まれ、宮尾料理長の指導で調理した豚汁とバーベキューで腹を満たし、適度に酔いが廻った頃キャンプファイヤーを囲み、雲間に見え隠れする中秋の名月を眺めながら、昔懐かしい山の歌を歌いまくりました。その後歓談の場をバンガローに移し、夜が更けるまで若き日の思い出話に花を咲かせました。

翌朝は、まき割り・飯炊き・小屋掃除と皆で作業を分担し、美味しい朝ごはんをたいて、三々五々解散しました。

今年は、現役も含め多くのOBGに参加頂けます様期待しております。



▲キャンプの朝・全員集合(カメラマンを除く)



▲右にカメラマン

投稿：100名山から200名山へ

長谷川徹（S.40年卒）

会社OB会同好会に「山行クラブ」があり、約45名が活動している。岩や雪はやらない所謂中高年登山のクラブ。4年ほど前の平成17年秋に「会報」を見ていた家内から、100名山を登った（5人の）先輩の記事を読み「お父さんもやったら」と背中をちょっと押された。数えてみると残り75座・「う～んあるなあ。まあ数が多い方が、楽しみが沢山残っているということ」と考え、ピークを目指すことに。登るに当たっては、出来るだけその山が美しく輝いている時期に登りたい。また山に頭を下げてお詫びをしたこともあるが、単に頂に立てばよいという様な、山に失礼な登り方はしないように思っている。

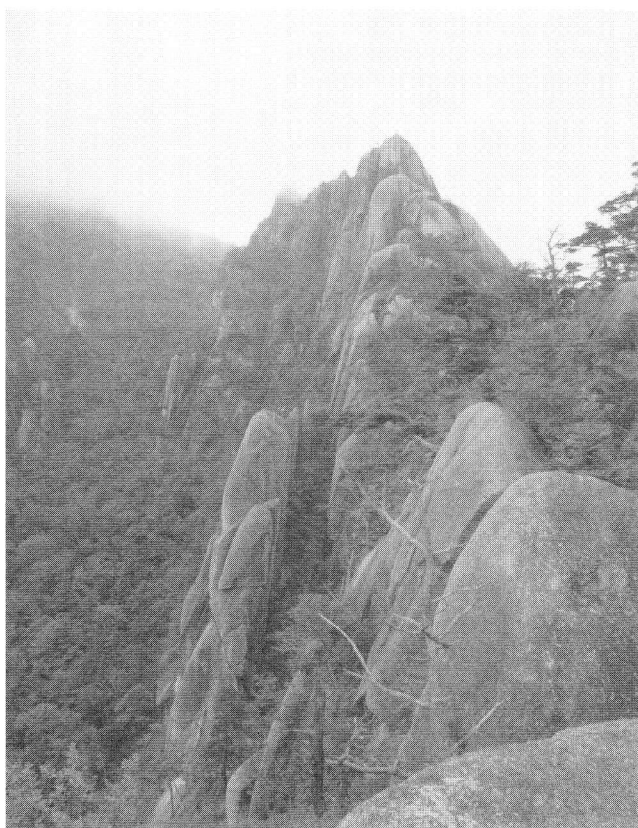
100名山はH17年秋に10、H18年30、H19年18座に登り残り17座と少なくなったので、H20年から200名山（2人の先輩が達成）も目標に追加（残87峰）。H20年15座+21峰、今年9月に家内と快晴の焼岳に登って100名山を終了。下山後西糸屋でビール・ワイン・冷酒で乾杯！200名山は31峰登頂（この間クラブ山行に年間15～20回程度参加）。以下今年登ったいくつかの山行を報告します。

*三嶺（1,893m）……徳島・高知

5月に四国最奥の三嶺（みうね）に3人で登った。瀬尾さん（77歳）は納見先輩に大変お世話になっていて200名山に残すところ12～3座という事で頑張っている。もう一人は、いつも一緒に登っている住吉さん（62歳）。5月13日に東京を出発、14日剣山に登り、翌15日8時過ぎに名頃から登る。名頃は祖谷の最奥の山村で人影が見当たらない。その代わりに等身大の人形があちこちにおいてあり、これが良く出来ていてつい声を掛けそうになるほどの出来栄え。ブナ、ミズナラ等の原生林を抜けると、まさに大草原の中に三嶺がある。東に剣山、西に西熊山・天狗塚へ国の天然記念物になっているミヤマクマザサとコメツツジの緑の絨毯が続き、四方山また山で足元に祖谷の溪谷が続く絶景。コメツツジはまだ開花していなかったが、花が咲いたらさぞかしと思われる大群落が続いている。山頂直下に明るい池があり綺麗な避難小屋がある。剣山からの縦走もよさそうだ。菅生に下山、途中初めて「やましゃくやく」に出会う。祖谷は新緑の淡い緑の中、あちこちに薄紫の藤が美しい春の山里だった。交通アクセスは良くないがお勧めの山である。

*大崩山（1,643m）……宮崎

5月29日宮崎県の北部にある大崩山に登った。九州にこんな山があるのかとびっくりする花崗岩の山である。宮之浦岳へ向かう皆と別れ、延岡から約2時間強かけ登山口着。大崩山荘を経て湧塚分岐まで祝子川沿いの不明瞭な路を細い退



▲大崩山：下湧塚から上湧塚をみる

色した赤テープを探しつつ進む。分岐から大石伝いに飛び、ステンレスの橋を渡り鎖を使って湧塚コースに入る。しばらく急登の後ロープにつかまり袖ダキに出る。垂直に切れ落ちた谷を挟んで、小積ダキの大岩壁が眼前に現れ、迫力満点の景観にしばし呆然。これから登る湧塚の岩峰群にも圧倒される。下湧塚・中湧塚の花崗岩の岩をロープにつかまって登り、丸っこい頂を四つんばいになって、そろりそろりと進む。左へ滑れば垂直の谷へ、一卷の終わりである。上湧塚は怖いので、巻道に逃げる(下・中湧塚も巻道あり)。上湧塚を過ぎると一般道、笹藪のトンネルを通過して頂上。先行2パーティに出会う。下山は同じ道を引き返す。湧塚は全て巻道を下る。すばらしい岩峰群の景観とともに、バランスの悪くなった私には緊張を強いられた山であった。17時30分下山、祝子川温泉で汗を流す。

*日高カムイエクウチカウシ (1,979m) ……北海道

7月2日Kさん(71歳)とSさん(62歳)の3人で日高カムイエクウチカウシを目指す。札内ヒュッテ先ゲートから林道歩き2時間弱、七の沢出合に着く。ここで沢靴に履き替え数回の渡渉を繰り返し、蚊・ブヨ、棘のある草に悩まされながら14時に八の沢出合のキャンプ場着。先着1パーティ3名。即製の釣竿でヒメマス釣り上げ、焚き火で焼いた一部をおすそ分けに預かる。旨い。翌3日は4時半に出発。すぐに沢靴着用。シーズン初めのため、かすかに残る径が草に覆われていて判りづらい。渡渉点を探したりで時間を食う。途中から雪渓となり、軽アイゼン着用、スノーブリッジ状の処もあり、二股まで3時間、さらに三俣まで1時間を費やす。三俣から連続



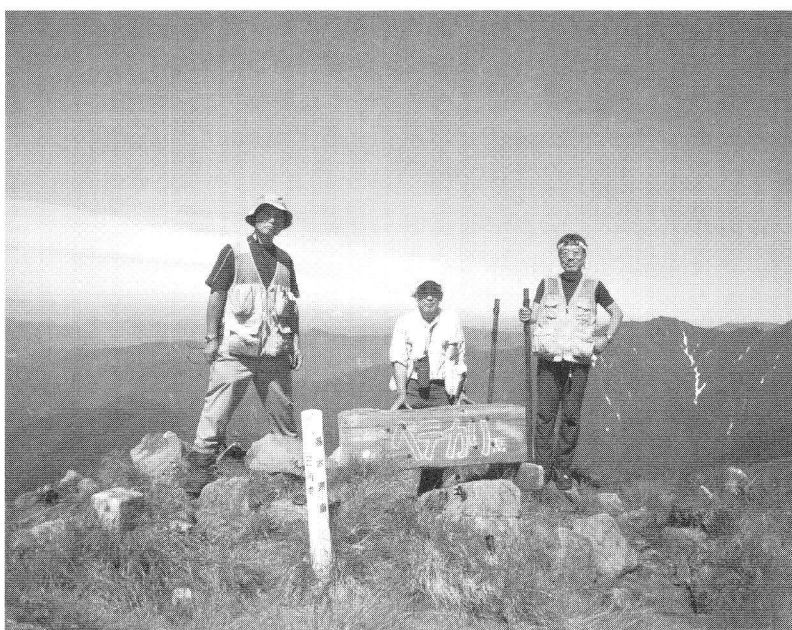
▲カムイエクウチカウシ山：札内川・八の沢出合

する滝の左岸の高巻道を笹や木の枝につかまりながら進む。草つきのいやらしい場所を上へ逃げたら這松帯の厳しい藪こぎを強いられ、八の沢カールの到着が12時になってしまった。ここは福岡大3名が熊の犠牲になった場所である。ピークを見ながら登頂を断念し、涙を吞んで下山。下りも雪解けで増水した渡渉に苦勞し、暗闇迫る19時20分にテン場着。3日目は後の予定があるので、再挑戦をあきらめ下山。

*ペテガリ岳 (1,736m) ……北海道

7月5日Kさん、Sさんの3人でペテガリを目指す。初日はニシュオマナイ川沿いの林道歩き3時間40分で神威山荘泊まり。北海道の避難小屋は何処も立派。翌日はペテガリ山荘までニシュオマナイ川から尾根越えてベツピリガイ沢に下り、超立派なペテガリ山荘に11時前に着く。3日目は朝2時半にヘッドランプを点けて出発。1050mのコブまではジグザグの急登。今日も快晴。アップダウンを繰り返しながら西尾根を進み、7時前に1031m展望台に着く。道はしっかりして

いて危険箇所なし。眼前にペテガリ岳が聳える。一旦70～80m下った後緩むことのない500m強の急登の後、360度日高の山々を見渡せる山頂に9時過ぎ着。ペテガリは周囲山また山である。カムエク、神威岳等景色を十分堪能した後下山。夏の強い日差しの中、アップダウンを繰り返しながらの西尾根は長い。熱中症気味になりながら、3時前に山荘着、冷たい水ではてった身体の汗をぬぐう。さっぱり。翌8日は、Kさんが帰京するため1時40分に出発。峠



▲ペテガリ岳：遙かなる山

を越えた付近から雨となりその後雨中の林道歩きを3時間。千歳空港にKさんを送り、支笏湖畔の温泉でくつろぐ。天国！

まさに山の素晴しさは尽きない。下山後の温泉とお酒が最高の至福の時を与えてくれる。現在165峰を登り、残り35峰ではあるが、歳には逆らえず最近の膝の痛みも少しあり、バランスが相当悪くなってきたので、無理をせずに楽しんで登るつもりである。

60歳を越えてから自然の中に入り楽しめるのも、山の会現役時代に沢山の経験をさせて貰ったからこそであり、稲山会の皆様に対し感謝が一杯である。

現役からの投稿：富士山頂での環境観察

現役：吉見浩一郎

初めまして。理工学部環境資源工学科の吉見浩一郎と申します。今夏に研究活動の一環で富士山に登頂したので、その報告をさせていただきます。

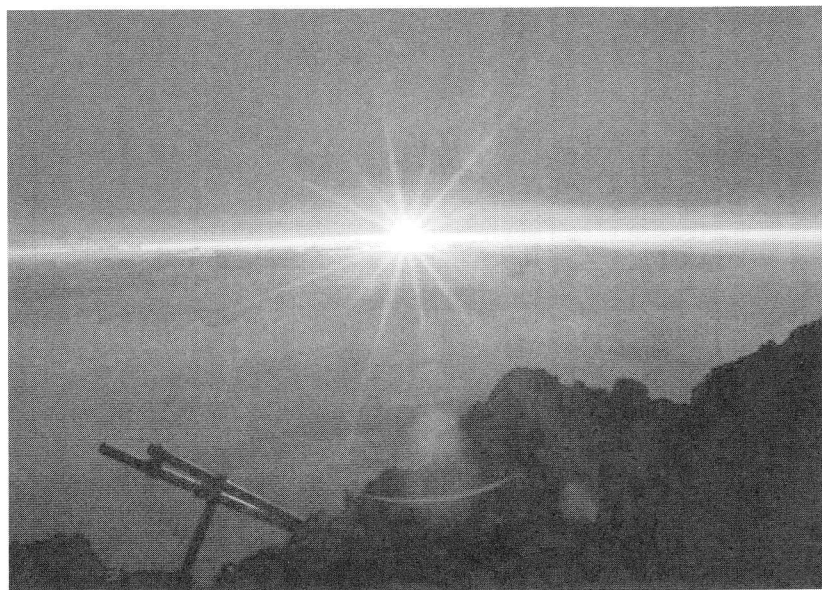
私が所属している環境資源工学科大河内研究室は空気と水を研究対象とした環境化学を扱っています。空気中の微粒子やガス、降水、陸水といった試料を採取し、適切な処理を行った上で、酸性物質、重金属、有機化合物といった様々な環境汚染物質の分析を行っています。

大河内研究室では毎年夏に夏季集中観測を行っています。採取場所は西早稲田（理工）キャンパス、御殿場口太郎坊（1300m）、富士山頂（剣が峰・富士山測候所、3776m）の3地点で、研究室全員で行う一大イベントです。今年度の観測期間は7月16～28日で、私は26～28日に富士山頂の観測を担当しました。

25日午後、大河内先生、M1（研究科1年）の方と先生の車で御殿場に向かい、市内にあるNPO法人「富士山測候所を活用する会」の事務所で他大学の方と合流し、1泊した後、26日早朝に事務所の方の車で富士宮五合目まで送っていただき、登頂を開始しました。メンバーは早稲田大学が3名、他大学の方が3名の6名で、私を含め富士山に登るのは初めてだという方が大半を占めていました。

しかし天候に恵まれ、汗が止まらないような熱気の中、途中までは非常に良いペースで登ることができました。途中までなのは、私が九合目の辺りで足がつってしまい、後続を止めてしまったからです。今考えると2泊3日には荷物、特に衣類を持ちすぎたかと反省しています。そんなアクシデントに見舞われつつも昼前には浅間大社に到着し、そこで一休みした後測候所に入りました。

測候所に入ってから28日に下山するまでの間はほとんど測候所に閉じこもっていました。特に27、28日は共に風が強く、また常に霧が発生しており、定期的に行う試料採取や点検以外では外に出ることはありませんでした。強風に関しては、採取器の点検の際には測候所の屋根に上るため、万が一にも落ちることのないよう気を張り巡らせていなければならなかった程でした。それでも試料採取時に、運よく視界が晴れることもあり、駿河湾、甲府盆地、果ては東京の方まで見



▲富士山頂から夕陽を見る

渡することができ、景色を満喫することができました。個人的には、26日夜の甲府市の夜景と同日夕方の方の富士市方面の工場群が印象に残っています。工場群に関しては複数の煙突から遠目からでもはっきり判る程度の煙が排出されており、それを目にしたとき何故か自分の研究（降水中の有害有機物質の分析です）に直に触れたような感覚に落ちいったことを憶えています。

28日午後に御殿場ルートから下山しました。下山時は濃い霧に覆われましたが、特に影響もなく太郎坊に到着できました。

全体の感想としては天候に恵まれたと感じています。私達以前では悪天候により途中で宿泊をした班もあったので、本当に運が良かったのだと思います。

また、今度は研究ではなく趣味としていつか再び登りたいと考えています。



▲富士山頂の釜（火口壁）を見る

報告：高等学校山岳部・ワンダーフォーゲル部の現状

2009年3月に、早稲田大学に進学数の多い高等学校の山岳部・ワンダーフォーゲル部の顧問先生に現在の高等学校生徒の山登りに関する現況と意識のアンケート調査をお願いした。その回答の中から10校の高等学校を紹介します。

質問項目と各高等学校からの回答

	質 問 項 目	A高校	B高校	C高校	D高校
①	現在の部員数（1年～3年合計数）	15名	13名	4名	8名
②	登山活動の状況は	かなり活発	かなり活発	あまり活発でない	かなり活発
③	部員数の傾向は	増加傾向	一定数	減少傾向	最近増加
④	部員の定着は	定着している	定着している	定着している	定着している
⑤	大学進学後の登山活動は	他のスポーツ	登山又は止める	他のスポーツ	登山又は止める
⑥	大学進学後山のクラブに加入は	判らない	友達同士	友達同士	ワンゲル部・登山ハイキングクラブ
⑦	山登りのジャンルは	縦走・フリー	フリー・環境保守の登山	ハイキング	縦走・フリー
⑧	海外の登山への興味は	魅力ある対象	魅力ある対象	対象でない	対象でない
⑨	登山に関する基本的な興味は	勉強のリフレッシュで山登り	山の興味あり主体性がある	携帯の通じない所には行かない	文化部と兼務勉強のリフレッシュ
⑩	近年の学生気質ではグループでの行動をあまり好まない？	その傾向はない	その傾向はない	あまり好まない	団体行動の指導をしている
⑪	大学の山岳クラブはどの様な姿であれば学生に魅力あるクラブですか？	上下関係のない楽しいクラブ	幅広い登山のクラブ	それが判れば高校でも採用します	幅広い登山のクラブ

	E高校	F高校	G高校	H高校	I高校	J高校
①	22名	6名	20名	11名	22名	8名
②	かなり活発	あまり活発ない	あまり活発でない	かなり活発	かなり活発	かなり活発
③	増加傾向	増加傾向	一定数	減少傾向	増加傾向	一定数
④	定着している	一部途中退部あり他のクラブと掛け持ち	定着している	一部途中退部	定着している	一部途中退部
⑤	他のスポーツ	スポーツは止める	スポーツは止める	不明	他のスポーツ	他のスポーツ
⑥	判らない	判らない	友達同士ほかと	大学ワンゲル部等	友達同士	大学ワンゲル部
⑦	縦走	ハイキング	ハイキング	不明	フリー	縦走・ハイキング
⑧	魅力ある対象	魅力ある対象	対象でない	不明	魅力ある対象	魅力ある対象
⑨	文化部と兼務温泉好きである	登山はするが大学山岳部には入らない	予備知識もなく連れて行ってもらうだけの傾向	山岳会は10%？スキー・アウトドア	学業と両立山一筋は困難	学園祭等は活発に取組むが
⑩	学年の隔たりなく仲良くやっている	そうは思わない	分担を決めて配慮している	グループ行動は好まない傾向	あまり思いやりがない傾向がある	特に見られず
⑪	他の活動も認める自由参加のクラブ	関わり方がさまざまです、特色を出す	自然を取り戻すアピールを	精鋭登山ー少数楽しい登山ー多数と推察します	技術講習等に参加させ、経験・登山技術の向上で自信を付けさせる	自由な雰囲気

* 各高校の回答から下記の傾向が推察・分析される。

- 1) 高校山岳部・ワンダーフォーゲル部は、ある一定数の部員が在籍し、顧問先生の指導での登山活動が行われている。
- 2) 高校生の登山の基本的な興味には多様性があり、山一筋の傾向は見られない。
- 3) 大学進学後は友達同士の登山とか、自由で幅広い雰囲気の大学クラブに進む傾向が見られる。
また大学進学後、登山を止める傾向も見られ、他のスポーツに転向してゆく傾向もある。

『春スキー』のご案内

山の会のOB会、前代表の市村さんが中心となって、10数年前から実施していました「山とスキーの会」のスキーを、今年も以下の要領で企画致しました。皆様、ご家族・ご友人をお誘いあわせのうえ是非ご参加下さい。貸切バスの中で宴会をやりながらの楽しいスキー・ツアーです。

出発日及び予定：2010年3月5日(金)：東京駅丸の内北口集合20：00出発、当日、夜に温泉宿着

3月6日(土)：終日スキー、夜は宴会

3月7日(日)：午前中はスキー 12：00頃宿を出て東京駅に18：00頃着

場所：以下を予定しています。候補①昨年と同じ乗鞍高原スキー場 ②丸山スキー場 ③菅平

詳細は2月6日(土)の新年会でご案内致します。是非、ご予約下さい。

『春のハイキング』のご案内

今年は昨年に引き続き、都心に近く駅から歩いて登れる家族向きの山(弘法山公園・吾妻山コース)を計画しました。

小田急線の秦野駅から鶴巻温泉を目指します。途中、桜のスポットとして有名な弘法山公園を通り、吾妻山を経由して鶴巻温泉へと下ります。最後に温泉で一汗流せる絶好のコースです。是非皆様ご夫婦で、お孫さんも一緒にご参加下さい。

1) 日 時 4月10日(土) 10時集合

2) 集合場所 小田急秦野駅改札口

3) コー ス 駅→(30分)→浅間山→(10分)→権現山→(10分)→弘法山→
(30分)→善波峠→(30分)→吾妻山→(20分)→鶴巻温泉駅

4) 昼 食 各自ご持参下さい。

5) そ の 他 少雨決行

6) 問い合わせ 齊藤延雄(45卒) 電話045-831-1792(自宅) メールnobuo_saitou@tokyotekko.co.jp

訃報：2009年5月に杉山宏さん(S.36年卒)、2009年7月に山口昌之さん(S.36年卒)が逝去されました。故人を偲び、ご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

明けましておめでとうございます。

世の中リーマンショックからドバイショックと暗いニュースが続きますが、昨年は映画「劔岳・点の記」が公開され、劔岳が山岳関係者だけでなく、一般の人達にも、日本屈指の岳であることが知られた1年でもありました。

9月末に同期(41年卒)で鹿島槍ヶ岳に登った時、快晴下、北方稜線から劔岳まで一望のもとに見渡せました。写真を添付しておきます。山にうるさい連中なので、右から左まで山の名称を確認し合いました。右から大窓、池ノ平山、小窓、小窓ノ頭、小窓ノ王、三ノ窓、劔尾根ドーム、劔尾根ノ頭、チンネ、八峰ノ頭、長次郎ノ頭、長次郎ノコル、本峰と続き、更に平蔵ノコル、前劔、一服劔へと続きます。

劔岳の地形は複雑ですが(それで測量が最後になった)100年後の我々が間違えれば先達に笑われてしまいます。もし間違えがあれば教えて下さい。

今回は会員と現役の方の投稿がありました。今後、投稿が増えること期待しています。

今年が皆様にとって、よいお年であることを祈りつつ。

齊藤雄二(S.41年卒)



▲鹿島から劔を見る